

「アイルトン・セナの死んだ朝」

そこには、いつまでもあの夏があるんだと思っていた。簡単な話だ。きまじめなやり方で目を閉じたり、星空に目を凝らしたりさえすれば、そう思っていた。青い草は噛めば味がしたのに、いま、すべては乾ききってしまったみたいだ。

あの夏は、霞の向こうにぼやけて見える。

それは、あの夏の蒸し暑い夜のうたげ。半裸の友だちや、鍋の湯気の向こうに、セナ。きみの横顔を見たのに似ている。

きみは、あのアイルトン・セナの死んだレースをテレビで観た。それから、きみは髪を短く切り、少年のようにスクーターに乗り、煙草を吸った。そうしてみんな、きみをその英雄の名前で呼ぶようになった。

だから、僕もそう呼んだ。

そんな、誰もが知っている英雄がいたこと僕は知らなかったのだけれど。

その街のこと。僕は多くを知らないのだ。蜃気楼のように海の向こうに現れては、夢だったかもしれないと思う。そんな街。

きみは、それに似ていたと今では思う。きみはあの街を歩き続ける透き通る精霊だった。形のない、肉体をもたない霞のように、あの街を、みんなの言葉の上を、無責任な他人というものの全てを走り続けて、きみは最後に天を仰いだ。

「ねえ、この海には魚なんて一匹だっていない。そうでしょう？」

その街の人間が一昔前、あのアイルトン・セナに熱狂していたことしか、僕は知らないのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

丘の上の古いホテルに、開放しているプールがあることを知ったのは三日目だった。僕はリタに電話をして、大きな麦わら帽子のリタとバスに乗り、上り坂。僕は車酔いに耐え続け、リタはずっとハッカ飴を舐めていた。

「これ、ドロップスの当たりでしょ？」

大きな木のそばをバスが通るとき、木陰で休んでいた農家の少年は手を上げた。

「大人になったら、決めてたの。ドロップスを何箱も買って、ハッカだけ集めてひと箱作るって。」

リタは鳥のように高く笑う。

不健康な青い色をしたプールで。リタはきちんと、場に適した、ふさわしい泳ぎ手になり、二日酔いと車酔いの僕は泳がずに日陰でプールの浮かぶ泡沫が消えていくのを見ていた。

リタは変にストイックなところがある。前に、同じ店では同じものしか飲み続けないのだと言って、いつか、ウイスキーの新しい瓶を一人で空けてしまったことがある。八月は毎年、ひとつきまるまる美容と健康のために仕事を休むのだと言った。リタは何往復もクロールをインターバル的に泳ぎ続ける。正午過ぎに一度、プールそばの溝に痰を吐いた老人に文句を言っただけ。

僕はリタから預かった彼女の妹のカメラで何枚か泳ぐ彼女の写真を撮った。寝てるなら、ターンしてるところ、写真を撮って。あたしターンしてるのが一番好きよ。世界が回るんだよ、全部が水色でき。

僕はターンを数枚撮ってから、電話線に止まっていた緑色の鳥を撮ってカメラを置いた。きっと彼女が仕事へ戻る九月ごろ、水しぶきだけの写真が5枚ほど現像されて、リタは何の写真かわからずに、捨ててしまうだろう。

緑色の鳥のほうは――

彼女はきつと気に入るだろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ここ二日のゲラおじさんは、機嫌が悪い。蒸し暑いからだよ。と僕がうそぶけば、「そうさ、俺は毛深いさ。夏だつてのに毛深くつて、ばかみたいだと思ふだろ。」いつもの煙草をカウンターに置く。

ゲラおじさんは、冷蔵庫の前にいつも座っている。扇風機が壊れてから、というが、それがいつなのか誰も知らない。扇風機はもう、戦災博物館の展示品だ。座っていつも、十年前の選手名鑑か古新聞か、腕時計の裏を見ている。腕時計の裏には、彼の娘の子どもの頃の写真が貼られていることは、誰もが知っている。

娘さんは最近お母さんになったんだつて。扇風機も買い替えるべきだし、写真も今のやつに貼り替えるべきだ、というのは、瓶コーラを買いに来る子供たちの意見。「おれたち、毎日金落としてるじゃないか、扇風機ぐらい。ケチ！」他人事にまるで本気になるのが、彼らの仕事。

僕が三本煙草をふかしている間。新聞を買いに来たマダムが一人。煙草を買いに来た配線工が一人、瘋癲老人が一人。マツチを買いに来た女が一人。瓶コーラとアイスキャンディは飛ぶように売れる。そして万引き三人。ある少年は箱入りキャラメルを。ある少年は成人雑誌を。ある少女は生理用品を。

「今日は繁盛だね。たった煙草三本の時間で。」

「牛乳を買いに来る女がいてよ、癩に障るんさ。サンングラスの奥からよ、牛乳をじろじろ見てよう、これは古いから取り換えろつての。四本目をようやく買っていきやがった。」

娘さんに似てるんだね？と言うと、そんなことはない、と息巻いた。

「俺の娘は、牛乳が気に入らねえなら文句も言えず、子牛から一匹育ててしまうような、そんな女だよ。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

リタは長電話をすることに、ある種の使命感を燃やしているように見える。僕が部屋へ戻ってきてても、受話器はまだしゃんと、リタの耳と肩に挟まっていた。

(…)
「あいつのところで買わないほうがいいわ。ケミカルが混ざってるの。速すぎるのなんのって、五倍速の回転木馬に乗ってるみたいだったわよ。」

(…)
「あいつ、ジジイでしょ、それでインポだからね。そういうの仕入れんの、仕方ないわ。」

(…)
「なに？明日も店に出ないの？あんた、くいっぱぐれるわよ。ほら、新しいコが入るとか入らないとか。わかんないけどね、もの静かで短髪なんだってさ。そういうの、モテンのよ。」

(…)

僕は便所に入って、ポルノ雑誌を開いてみる。でもやることもないので、雑誌を広げて、チリ紙で折り紙を折り始めた。チリ紙は、世界で一番折り紙に向かない紙として名高い。

いまにも寝そべってしまいそうな、「ライオン」が四匹、女の裸の上で身もだえしている感じになったとき、リタがドアを開いた。まだ受話器を持っていた。卵のような顔は、いっそう縦長になった。

「電話、そろそろ切るわ。あんまり話し過ぎて、こっちの子、ラリっちゃったみたい。」

リタの微笑みを見ていたら、突然悲しみが押し寄せてくるような気持になった。

あの「バナナフィッシュ」の主人公の気持ち。その百分の一くらいは、僕にもわかるのかもしれないと思うことがある。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

僕が、まだ永久歯の生える夢を見ていたくらい、昔の話だ。

「歯抜け遊び」というすばらしい暇つぶしを教えてくださいましたのは、エンジェルス野球帽をいつも反対に被っていたお兄さんだ

った。名前はもう知らない。忘れてしまったのかもしれない。よく日に焼けた肌と、ニカツと笑うときのきれいな真っ白な歯と、メンソールの匂いを思い出す。

僕たちは道端の壁のレンガを注意深く触りながら歩いた。するとたまに、ぐらぐらと動く「歯抜けの歯」を探り当てる。レンガをそつと引きはがす。つばを飲み込むお互いの音が聞こえるくらい、僕たちはその小さな穴を覗き込むために顔を近づけた。

ぐらぐら揺れるレンガの奥は、ひとびとの秘密の金庫であり、ごみ箱であり、墓場だった。「みんなそうやって、隠し事をしているのに、そんな隠し事をしているのは自分だけだと思ってるんだ。」彼はやっぱり白い歯で笑った。

出てくるのは、埋蔵金の札、男女の写真、手紙、避妊具、とわかりやすいもの。文字の刻まれた遊戯場のメダル、卒業証書、紙にくるまれたつけ爪、ときわめてパーソナルなもの。お兄さんは、そのたびに、それらの品を「判定」にかけ、我々の戦利品として「公平に」配分したり、元に戻したりした。

今までで二番目に大きい額の札束を見つけた日は、午後からにわか雨が降りだした生暖かい日だった。その日、お兄さんは見つけた札の何枚かを折って、僕にライオンとアルマジロの作り方を教えてくれた。ティーレックスはまた今度と言って。その日の夜、彼は、裏路地でひき逃げに遭って死んだ。お金をくすねたことがなにか組織がらみの逆鱗に触れて殺されたとか、そんな大きな話でもない。運がなかったただけだ。

こんな話を君にするのは、今日、帰りにふと触ったレンガが外れたから。海岸通りの一本裏の路地。ラファエロの天使のような落書きの壁。長い睫毛の瞳の部分のレンガ。そこには折りたたまれた小さな紙きれが隠されていた。そこにはこう記されていた。

「大人になったら、女はみんな若返りたい。でも、あつという間に老いさらばえてしまうことはもつと難しいことを誰が知っているでしょう。みじめだったらしい自分の歳。何年生きたかって？ バースデーケーキなんて嫌味じゃないの。退屈な人生。今年も叔母さんが焼いてくれるケーキを、どうか今年も代わりに食べてください、永遠に子どもの姿の、哀れな天使様。」

僕はそつと、誰にも見られていないことを確認するような気持で、その紙切れとレンガを元に戻した。僕は骨董通りで見つけた、羽を広げた悪魔が柄に彫られた、小さな金色のフォークを、夜中にそつと、そのレンガへと置きに行つた。暗がりの天使は少しだけ伏し目がちに見えたが、きつと大丈夫だろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

誰かが、大きな鍋を拾つたのだそう。それで、誰かが足を縛つた鶏を二羽。誰かが人の頭みたいなの西瓜。誰かがごたごた、野菜。誰かがとつておきのレコード。誰かがウイスキーの大瓶を持ってきて、そうして狭い小部屋に二十人以上の男女が集まつた。名前は知らないけれども、よく知っている面々を見た。大通りの煙草屋の娘、そこに煙草を買いに来る運送屋の兄弟、鶏の串の屋台の男の子、そのガールフレンド、リタの店の女の子たち、もちろんリタもいる。ボーイはネクタイを外して来た。ゲラおじさんの親戚の娘が二人、ゲラおじさんのところに毎日牛乳を運ぶ、牛乳屋の息子。

「ゲラおじさんは？」と笑いながら誰か。

「若い奴らの声は悪質なカナリヤ。難聴になる。」とゲラおじさんの親戚の娘の金髪のほうは口真似。ハスキーな声、血は争えない。

ガラス窓をどんなに大きく開いても、窓にはいつでも結露が満ちて、まるで雨でも降っているみたいに見えた。庭には、むしろられた鶏の白い羽と、とさか付きの頭が落ちていた。リタはいちばん子どものボーイのネクタイを取り上げて遊び、牛乳屋の息子は妙なリズムでレコードに乗り続けて何人かが笑つた。煙草屋の娘は、背の高い男と踊り、それを見ながら運送屋の兄は顎ひげの剃り残しをつまんで抜き続け、弟は酔っぱらつてずっと一人で歌を歌つた。

部屋に一つしかない電灯のシェードは取り外されて、誰かがフリスビーみたく庭で遊び始めたが、長くは続かなかつた、けれども誰も取りに行かない。裸電球は上半分を蜘蛛の糸と埃で曇らせたまま、静かに揺れ続けていた。

誰かが、西瓜を庭へ持ち出した。誰かが野球のバットを持ってきた。誰かが、金髪のかつらをもつてきて、その西瓜にかぶ

せた。

「趣味の悪いこと、よく思いつくわね、あいつら。」

リタは顔をしかめながら、庭へ走りだして行った。みんなが、その金髪の頭を取り囲んだ。バットを振りかざした男が叫んだ。

「返り血を浴びるぜ！」

笑い声と叫び声とともに、いくつもの白い体が庭の闇に露わになって、幽霊みたく浮かんでいた。

確かに僕はそのとき、彼女を見たのだ。確かに、彼女はそこにいた。けれども、この事實は、事実と呼ぶのにあまりにも頼りない。その夜、誰もが彼女がそこにいることを知らないような顔をしていたのだから。みんなは彼女にセナという名前を付けて取り扱った。それだけが、最初で最後の確からしさのすべてだ。

たった今そこに居場所を見つけたみたいに、両膝を立てて座ったセナは、庭の騒ぎを見るでもなく見ないでもなく、黙って煙草を吸った。気づけば、薄暗い部屋には僕とセナだけが残った。みんなの喧騒は夜の闇へ遠ざかってしまつて、静かだった。

生きている肉体が、その狭い部屋にもうひとつあつたということ。それが、ほかならぬセナであつたということ。今考えれば、それは不思議で仕方がないことに思える。

僕は煙草を一本くれないか、とそつと、ささやくように言った。それが一番、正しいやり方に、その時の僕には思えたからだった。けれどもセナは僕の顔も見ずに箱ごと僕へ放つて、立ち上がり、玄関のほうへ歩きだしてしまった。

「10時に、うちのネコにミルクをあげなきゃ、いけないから。」
音もたてず、ドアは閉まつた。

セナの吸う煙草は、ハツカ煙草で、それは海の潮の香りに似ていた。でもまったくそれはそれだけで、事実にもならない。

★★★★★★★★

セナの本当の名前を、リタはもう知らないんだという。

「きつと、もう誰も覚えていないんじゃない？あの子だって、自分でもう忘れてるかもね。自分で名乗り始めたわけじゃないの。みんながそう呼び始めたの。」

リタは、コットンで化粧を落としながらしゃべる。

「あの子が、どこに住んでいて、誰と住んで、親は何の仕事をして。そんなことはだあれも知らないの。」

座ったリタが床に押し付けて、不自然な方向に曲がっている足の指。右の親指。一週間前に塗ったというベディキュアは、その癖のせいで、もう右足の親指と人差し指だけ剥けてしまっている。

「私たちが知ってるのはさ、あの『F』の、レーザーのセナだけよ。」

「死んじゃってさ、アイルトン・セナはヒーローだったでしょう。英雄だったでしょう。それが死んじゃってさ、もっと大きななにかを失っちゃったって感じだったのよ。いつの時代も、ヒーローの死ってそんなものでしょう？それで、可哀そうかな。あの子、スケープゴートにされたってとこよ。私たちのさあ。だって、あの子はアイルトン・セナのことなんて知りもしなかったのよ。」

化粧を落としたリタは、いつも、とても聡明に見える。

「だってさ、おそろしいことだと思わない？私たち、一緒にいるってのに今でも、あの子のこと何にも、ほんとうに知らないんだから。知っているのはみんな、あのアイルトン・セナのこと、それだけよ。」

今夜は犬の声が遠く聞こえる。けれども星はどこかへみんな、隠れてしまった。

リタの話したこと。ほんとうならば、きつとセナは夢など見ないのに違う。それか、ずっと、いつでも、ずっとずっと夢を見続けている。セナは眠るように生きている。まぶたの裏側の世界だけを見つめ続けている。眠るようになって生きている。今夜もセナは、ネコを抱いて、水の底の魚のように眠る。

☆☆☆☆☆☆☆☆

金色のフォークをプレゼントした、あの、ラファエロの天使の瞳のレンガは、まるでどこかに通じるポストのように、その後も紙切れが投かんされていた。

僕は煙草を買いに行った帰り道、ふとした折に、そのレンガを剥がしてみたのだ。もちろん、誰もその通りにいないことを、はばかりながら。

「私に虫歯がないのは、親がキスもしてくれず、可愛がつてくれなかったからなの？」という紙切れに、僕は赤色の包み紙のキスチョコを、氷と一緒に詰め込み、

「子どもの頃に失くした、オリンピックの記念メダルがどこにあるのか教えてください。」
という紙切れには、僕はほんとうにオリンピックの記念硬貨を入れておいた。それは僕のほんとうの、子どもの頃の宝物の三枚の記念硬貨の一枚だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

この街の海の魚を見たことがない。

いつだって、跳ねてさえくれれば、見届けてみせる。そんな気持ちで僕はよくビーチに座っていたものだ。大きな海。どこかで汽笛の音がする。海鳥たちが自分の楽器を奏で合うみたいに空の上で鳴く。後ろの海岸通りから、クラクシヨンの音が止まない。そういうものの中で、僕は世界の運行というものを考える。何かが失われて、消え去っては、それを埋めるようにまた次の鳥が囀る。魚が跳ねることだって、きっと同じことだ。

いつのまにか日が暮れて、気づけばビールの瓶を片手に誰かが僕に囀るように歌いかける。パラソルを片付けるのを手伝って、と誰かがわめく。そうして、魚が跳ねる、なんてこと、いつのまにか忘れてる。そんな繰り返しを、僕はこの街の夏のことだと思っていたのかもしれない。

その日の、ビーチには跳ねる魚どころか、泳ぐ人さえいなかった。太陽があまりに高すぎたせいかもしれない。子どものお昼を作らないといけないから、番をしておいてね。婦人が言い残していった煤けた赤色、パラソルの下で、僕とリタはぬるくなりすぎたビールを飲んだ。婦人はもう今日は戻ってこないだろう。

大きなサンングラスをかけたリタは、たいへん、りこうそうに見える。リタは今日この街で消費されるビールが何リットルか、そんな生活に根差した数式はそらで計算できるほど、頭がいい。この街でビールを飲まないのは、自転車にまだ乗れない子どもたちと、ボーイ・フレンドの前でゲップを気にする特定の年頃の女の子と、それから、のら犬だけ。だから簡単な話と、彼女は言った。

目の前の海に無数に浮かんでいるモーター・ボート。日射を受けて、つるつると光るおもちゃみたいなそれらは、誰かがやってきて、それぞれのキーが指されるのを待っている。僕は、あれはどうしてずっと浮いてるんだ、とリタに聞いた。誰かが使ってるのなんて、見たことないけど。

「本当のことを言えばね。」リタは飲み干したビール瓶をらせんに回しながら。

「これはゼーンぶ売り物なのよ。ビーチの私たちや、通りの木陰で話してる家族なんかがね、指さして言うのよ。ねえ、あれなんかいいんじゃない？ いや、あっちの赤いほうが可愛いわ。なんて言ってるね。ねえ、あれを買おうよ。それでこの街を飛び出して、湾も抜け出して、どこかへ行ってしまうの。」

リタはビール瓶を、砂に押し立てて、立ち上がった。

「でもね、もつと本当のことを言えばね、私たちが休み休み、沖まで泳いで出るための小島なんだ。とくに今日みたいなお天気は。」

風がリタの肌のサンオイルの香りを運んでくる。僕らはそうして、本当に小島のボートを点から点。休み休み、沖まで出たのだった。僕は、船で体が温まっていくのを感じながら、この海がこの夏、洗い流してしまう女の子たちのサンオイルはどれくらいか考えた。魚が跳ねたかと思ったら、それは水の中で飽きずに鯨ごっこを繰り返す、リタのしぶきに過ぎなかった。

僕は、もう存在しないもの。蒸気でできた体の、明け方のごく短い時間だけ姿を現す精霊を、ひとびとの中に探しているような気持になった。いつそ、ごった返す、街の人ごみに立って、目を閉じてみたほうが、まぶたの裏、暗闇の中で彼女に会える。そんな気さえするくらいだった。そうして、そんなふうにしてセナの残像を追い続けることは、誰もいないビーチに腰を下ろし、いつまでも跳ねない魚を待ち続けることに似ていた。

☆☆☆☆☆☆

僕はレンガの、それが最後となる紙切れを読んだ。

「ねえ、親切なあなた。どこの誰かさん知りたくもないけど、ねえ。あなたにだけは、黒いサルの話をしてみようと思う。気づけば、お腹の上に座っている、黒い毛におおわれていて、赤く鈍く光る眼をした、黒いサルのこと、あなたは知っている？ 私の生まれたときにも、私の母がお腹に見たという、あの黒いサル。あれは悪魔ですか？ 何かのお告げなのですか？ 今こうして、書いている間にも、気づけばこのナイトテーブルの端に手をかけて、こちらを覗いているような気がする。誰も、こんなこと、言えないの。私、黒いサルに食べられないように、ひっそりと生きてるの。」

僕は、何かをそこに置くことも、言葉を残すことも、なんだって、なにもできなかった。

僕は初めて、紙切れをそこから持ち出すことにした。持っていくアテなどなかったのだけれど。

☆☆☆☆☆☆

「黒いサル？ゴーストのこと？死んだ人がさ、猿の姿をしてやって来るのって、よく言うけどね。どうして？」
眠れないリタは、新しく処方された睡眠薬を飲んだ。

「きつと、毛深いチビの男の変態のことを言っているのねエ。ゲラのおじさんのことを、うちのコたちは黒いサルのゴーストって呼んでるわよ。」

リタは黒いサルが現れても、撃ち殺して毛皮のマフラーにして笑っているような、そんな女だ。あまりに陽気で、力強く無頓着なのだ。

そして突然、黒いサルが意味していた何者かに、後から気づいて、死に至るほどの悲しみから抜け出せなくなるような、そんな女だ。

☆☆☆☆

僕を見たゲラおじさんが、笑いながらカウンターから身を乗り出した。実に愉快そうに言う。

「奴が来たんだ。それで俺は言っちゃった。残念だが、今日はワンちゃんネコちゃん用のミルクしかないってさ。そしたら奴は、「ええ、それでいいわ。」って表情一つ変えずよう、それでちゃんと四本並べさせて、ちゃんと四本目を買っていきやがった。なんだね、あれあ大したもんだよ。」

☆☆☆☆

「ねえ、どうしてずっとビーチに来なかったの？」

ゲラおじさんのところの金髪娘が僕にそう言った。

もうあそこに座りすぎて、ヘルニアになりそうなんだよ、と僕は言った。

「もったいないね。もう夏も終わるんだよ。」と彼女は言ったが、まったくそのとおりだった。

ビーチやパラソルや、広がる海も、船も、なんだかもう確からしさを失って、僕には見える。風はいつからか、寂しげに運んだ。海鮮市場にならぶ、この海で毎朝漁師が釣ってくるという魚もいまに霞んでいくのだ。不確かな幻想に形を与えていたのは、夏の日差しであり、長すぎた昼であり、人に夢を観させるような、蒸れた街の匂いだった。この街が、この活気と熱気が、まぼろしだった、そんな現実から逃れるために、夢の中に逃げ続けるために、ひとびとは今夜も歌を歌い、テキーラなんかを飲み続ける。

そうだ。現に僕はもう、あの誰もいないビーチに腰を下ろして、魚を待ち続けたりしないのだから。

☆☆☆

部屋の扉を開けると、ベッドわきでジグソーパズルにふけていたリタが、眼鏡の奥の眉をちよつと吊り上げて僕を見た。

「ねえ、どうでもいいことだけど、聞いたのよ。ね、あんたどういう吹き回しでセナのことなんか嗅ぎまわってんのさ？」
黙っていた僕に、リタは紙きれを取り出した。それはあの黒いサルの紙きれだった。

「あんた、いつからポエムなんか書くようになったのよ？どこまであの子のこと知ってるのかしらないけどね。」
リタはそれが僕が書いたものだと思っっているようだった。

「これとどう関係があるのか知らないけどね、セナは店を辞めたよ、誰の子かわからないけどね、中絶するのよ。黒いサルってのはその子どものことでしょう？」

僕は体からするすと力が抜けていくような気がした。

「その病院っていうの？隣の市に行くんだって。もうこの街にはいられないのかもしれないね。」

☆☆

僕はリタの店のカウンターの帳簿から、子どもを墮ろすために店を辞めたそのひとの住所を探し出し、書き写した。それは青いペンの二重線が引かれて消されていた。

朝、その住所の小さな部屋を訪ねたら、がらんどうのその部屋、海の見えるその窓ぎわに、わずかなものが残されていた。金色のフォーク、記念硬貨。それらは僕には、子どものころの宝物ではなく、もうただのがらくたのように見えた。僕は鍵も返さず、階段を駆け下りた。

☆

セナは言った。

「昔読んだ本なんだ。」

セナは言った。バスケットのなかに入っていたのは、小さくなって眠る黒猫だった。

「ある沼があるの。小さな沼でね、魚なんているのかいなのかわからないような、そんな沼なんだ。ある少年が、そこでも釣り糸を垂れてる。眼鏡をかけた風変わりな少年でね、彼はそこに巨大なヌシがいるって信じてる。みんなは彼を嘘つきだと言って言う。彼には、友だちなんていない。教室でも、ちょうど沼の魚みたいに、いるのかいなのかわからないような、そんな子なんだ。その男の子を気にかけている、隣の家の幼馴染の女の子が一人だけいる。彼女は、彼をみんなと打ち解けさせようと、いつも悩んでるんだ。」

ある日、とうとう男の子はヌシを釣り上げるの、それはそれは大きな、立派なヌシなんだ。女の子が来て言う。「この魚をみんなに見せようよ、そしたら誰もあなたを嘘つきだなんて言わなくなる。」彼は黙って首を振る。彼女は彼が照れているんだと思って、走ってみんなを呼びに行ってしまう。すぐにみんながやってきて、男の子は英雄になる。」

「でもね、私にはわかる。彼は、みんなを呼びに行く女の子の背中に小さな声でこう言っているって。「この沼にヌシがいたなんて、どうしてみんなに言う必要があるんだ？これは僕だけの魚なのに。」そうつぶやいてるんだ。」

「ねえ、この海には魚なんて一匹もない。そうでしょう？あなたはきっとそう言える人だって、私はそう思っていたんだ。」

バスに乗り込んだセナはすぐにこちらから見えなくなった。僕はバスが走り去って、海岸通りをそれで見えなくなるまでそこにいた。そうして何も見えなくなった。どこかで始まった夏が、そんなふう終わったからではない。はじめから、そこには何もなかっただけだ。